

江戸幕府寄合医師 添田玄春の医学と医療

深瀬 泰旦

順天堂大学医学部医史学研究室

受付：平成26年1月6日／受理：平成26年4月25日

要旨：江戸幕府寄合医師であり、のちにお玉ヶ池種痘所の創設にあたって、その設立基金を拠出した83名の医師の1人である添田玄春の日々の行状を記した「添田玄春日記」から、寄合医師としての公的な活動や医療の状況をさぐり、日常生活の種々相を明らかにした。添田玄春が当初の漢蘭折衷医から次第に蘭方医へ転換していく模様も明らかにすることができた。

キーワード：添田玄春、添田玄春日記、長崎留学、お玉ヶ池種痘所

はじめに

順天堂大学医学部医史学研究室山崎文庫に所蔵されている「添田玄春日記」は、江戸幕府寄合医師であり、のちにお玉ヶ池種痘所の創設にあたってその創立基金を拠出した83名の医師の1人である添田玄春の日々の行状を記した日乗である。この日記から寄合医師としての公的な活動や医療の状況をさぐり、日常生活の種々相を明らかにしようとするのが本論の目的である。

「添田玄春日記」について

はじめに利用した「添田玄春日記」(以下「添田日記」と略す)¹⁾について簡単にのべる。本日記は嘉永元年(1848)6月5日から元治2年(1865)12月16日までの16年にわたる日記である。しかし現存するのは嘉永元年、同3年、同4年、同5年、安政5年、同6年、文久3年、元治2年の8年間の7冊にすぎない。元治2年は4月7日に慶応と改元されたので、本来ならばその日以後は慶応とすべきところであるが、日記自体にもそのような表記はないのでそのまま元治の元号を使用することにする。

第1冊の表紙には「嘉永元年／日記／申六月五日」とあり、墨付き47丁で、嘉永元年6月5日

から12月12日までの日記である。記載の様式は、日付、干支、天候の順序で見だしがかけられており、これにつづいて○の記号を文頭にふして、短きは1行、長くても3行をこえることのない記事がつづく。

「添田用部屋」とか「添田執事」という文字がそれぞれの日記の表紙や裏表紙にしている。この日記をかいたのは添田家の執事であることがわかる。また玄春にたいして「殿様」と呼んでいるので、これによってもこの日記の筆者が玄春自身でないことは明らかである。

玄春自身の筆ではないので、玄春の社会的な言動や感想、心の動きがしるされていないのはこの日記の欠点かもしれないが、その反面玄春をはじめとして、雇人の細々とした行動までが詳細にしているという別の一面もあって、添田家の客観的な状況をしるにはかえって有利であるという利点もある。

この添田家の執事は職務に忠実な、几帳面な性格をもった、まさに執事には打ってつけの人物であったと思われるが、時には日付の干支を誤記するような誤りをおかすこともある。几帳面な様子がうかがえる反面、毎日その日の終わりにのぞんで書かれたものではなく、1日の出来事もかならずしも時系列にしたがって記載されてはおらず、

夜の出来事が先にかかれてあったり、朝の記事がその日の最後につけ加えられているというようなこともある。

第2冊は嘉永3年と同4年の日記で、墨付き78丁である。表紙は「嘉永三年庚戌年／日記／正月吉旦」とあり、裏表紙には「添田用部屋」とある。嘉永3年の日記は正月1日にはじまり12月晦日(30日)におよぶ。嘉永4年は最後の半丁に正月1日から3日までの3日間が記録されているにすぎない。

第3冊は嘉永5年の日記である。表紙には「嘉永五年／日録」とあり、墨付き66丁である。この年は1月1日から12月晦日(29日)の1年間にわたって記載されている。

第4冊は安政5年の日記である。他の冊とは異なりその表紙には「安政五とせといふとしの／日記／添田」と記されている。墨付き50丁である。この年の後半の7月7日から12月晦日(30日)までが記載されている。

第5冊は安政6年の日記である。その表紙には「安政陸歳在己未／日記／春王正月 添田執事」とある。墨付き40丁である。安政6年正月1日から3月20日までと、とんで6月1日から10月26日である。

第6冊は文久3年の日記である。その表紙には「文久癸亥正月／日記／添田氏」とある。墨付き62丁である。記載されている日は、文久3年正月1日から12月26日までである。

最後の第7冊は元治2年の日記である。表紙は他の6冊とは異なって、後から補われた別紙で、これは旧所蔵者であった山崎佐が修復したものである。表紙には「元治二乙丑正月／日記／添田氏」とあるが、この文字も山崎の筆跡である。墨付き65丁で、正月1日からじまり12月16日で終わっている。全7冊とも表紙共紙であり、合計は408丁となる。

玄春の跡式相続がかなう

添田玄春は文政9年(1826)に父玄成の長男として生まれ、就寧(なりやす)と称した。玄春の祖父道周は文化11年(1814)に江戸参府に出席

したオランダ人との対談を希望して、幕府にその願書を提出するほどにオランダ語に堪能であった。その血をうけた玄春は幕府寄合医師でありながら、お玉ヶ池種痘所の設立にさいしては欣然としてその挙に参加した漢蘭折衷医である。文久3年(1863)に長崎に留学し、ご一新後慶応(1868)8月15日に新政府から種痘館鑑定診察掛と命ぜられた。明治2年(1869)6月27日に44歳で死去した。礼譲院法譽自然得道居士と諡されて菩提寺である浅草の了源時に葬られた²⁾。

『続徳川実紀』嘉永元年8月4日の条に

父死して子家つぐもの十二人。寄合医余語古庵子良庵。添田玄成子良春又同じ³⁾

とある。この日父の遺跡をつぐものが12人あって、寄合医師余語古庵の子息の良庵と、添田玄成の子息玄春が同じく跡式相続がかなったというわけである。玄成も余語古庵ともに寄合医師であった。家督相続にさきだって相続人のお目見えがおこなわれるのが慣例であるが、「添田日記」にはそのような記事はみえない。玄春の幕府医官としての歩みがいよいよはじまったのである。

父玄成の百ヶ日は嘉永元年(1848)8月27日であるが、それ以前の8月4日に玄春は23歳にして家督相続をゆるされ、父同様扶持米300俵をいただいて小普請医師に就任した。

世襲制のこの当時でも亡父の地位を直ちに継承できるわけではなく、それ以下の地位につくことが慣例であったことを考えれば、小普請医師への就任は至極当然なことであったといえよう。のち嘉永5年に玄春は寄合医師に昇格した。

嘉永元年8月4日の「添田日記」には

殿様おめて度御家とく御請、御登城、御供、溝口様江も行く、御客来候人之名前左ニ記ス、溝口讃岐守様、義光院様、準之助様お出、夜ニ入御帰り也、其外馬嶋様、安部様、杉本様、関本様、御ほうず、理清、西川、林、榎之本、返順、戸田玄固、其外も御祝ニ来

とある。この日玄春は家督相続がかなってお礼登城し、退出ののちその足で親類筋にあたる溝口讃岐守の屋敷に報告におよんだ。親戚縁者のお祝いの人びとが続々と添田邸に足をはこんでいる様子がかれており、喜び一杯といった有様が行間にあふれている。これで玄春は晴れて添田家の当主になったわけである。

医学館講師になる

家督相続後、玄春がはじめて公務についたのは8月23日である。「添田日記」によると、この日医学館に出仕したとあり、その後は三日と八の日に医学館に出席している。月6回の出席ということになる。医学館でどのような教育にたづさわっていたかについて、この日記に記載はないので具体的にすることはできないが、教育に関係していたと考えられる。

幕府医学館は明和2年（1765）9月、漢方医多紀元孝によって神田佐久間町二丁目の司天台の跡地に創建された私立躰壽館に端を発する。名ある医師によって講義がおこなわれ、おおくの子弟が医学修業のために入学した。明和9年（1772）2月、いわゆる行人坂の大火によって講堂が焼失したので、多紀氏は私財をなげうって再建した。寛政3年（1791）10月には幕府の命によって官立となり、その名も医学館と改称された。この医学館も文化3年（1806）3月4日に焼失したので、その秋に下谷新橋通向柳原に移転した⁴⁾。玄春が勤務するころ医学館は新橋通にあったので、玄春邸からは指呼の距離にあった。

このころの医学館の教育内容については、山田宗円の後裔の記すところによれば⁵⁾、多紀養春院が館主（校長）として主宰し、10名の教諭が教育に当たっていた。このうちの3、4名が中心になって校務を総轄していたが、他の教諭はただ教育に専念する役目を帯びていた。この教育専任の教諭は月6回出校して講義をおこなっており、その課目は本道や外科、眼科、小児科などの各科にわたっていた。

一方医学生徒は官医の子弟にかぎられ、寄宿舎に入寮して勉学に励んでいた。医学教育は教諭に

よる講義のほか、輪読会もあり、生徒に入院中の患者を診察させてその診断の結果をもとに処方をするという、現在の医学教育において重要視されている、いわゆるベッドサイド・ティーチングもおこなわれていた。これからみると玄春が医学館に月6回の出仕をしていたというのは、教諭としての勤務をおこなっていたと考えていいだろう⁶⁾。

玄春が出仕する勤務先をこの「添田日記」からひろってみると、嘉永元年、同3年、同5年の出仕先はすべて医学館である。玄春がいつから医学館に関わりをもつようになったか不明であるが、嘉永元年（1848）の日記の冒頭から医学館での活躍がしるされている。その役割はさきにもべたように、教諭として月6回の講義をおこなっていたと考えられる。しかしその講義の内容については明らかにしえない。森潤三郎の『多紀氏の事蹟』にも添田玄春の名はみられない。ことほど左様に添田の業績は、あまり人に知られていないということができよう。玄春の動向をしる手懸りは、この「添田日記」以外には皆無であるといっても過言ではない。

医学所勤務となる

安政5年になると、日記に「登城」という文字があらわれる。この間の日記が欠けているので、どのような経緯で出仕先が変更になったのかについて不明である。嘉永5年暮に寄合医師に昇進しているの、これによって営中に出仕するようになったと考えられる。

嘉永3年には医学館への出仕が頻繁におこなわれるようになり、2年前の三と八の日の出仕とはことなっている様子うかがえる。このように頻繁に出仕するようになったのは、講師からたとえば世話役手伝いのような運営の中核にたずさわる地位についたのかもしれないが、それをしめす史料はない。

安政5年にはお玉ヶ池種痘所が設立されるが、この年の日記には種痘所への出仕についての記載はない。種痘所への出仕がみられるのは翌安政6年6月からである。もちろん寄合医師としての勤

務もこれと平行しておこなわれており、多忙の様子が日記にみえる。この種痘所はあくまでも私的な施設なので、官医という公的な身分をもった玄春がここへ勤務していないのはむしろ当然というべきかもしれない。この状態は種痘所が官立に移管される文久元年まで継続していたと考えられる。

文久元年10月25日に種痘所は官立に移管されて、その名称は西洋医学所とあらためられた。それにもなつて文久3年の「添田日記」には医学所——文久3年2月25日に西洋医学所から改称された——への出仕が目につく。寄合医師でありながら、本務は西洋医学所に移ったといえよう。この年正月21日から6月28日までは長崎に留学しているので、この期間は江戸を留守にしていた。

帰府後はふたたび医学所へ勤務するようになり、これが元治2年(慶応元年)までつづく。日記をみるかぎり、玄春の勤務先は医学館、江戸城、西洋医学所、医学所と、小普請医師や寄合医師という地位を保ちながら幕府関連の諸機関に出仕していたことがわかる。時間の経過とともに、玄春の立場は漢蘭折衷医学から蘭方医学へその軸足が移動している様子がうかがえる。

薬品会鑑定手伝

嘉永3年4月13日に玄春は薬品会鑑定手伝を仰せ付けられ、薬品会の運営の一翼をになうことになった。

薬品会は物産会、あるいは産物会ともいい、宝暦7年(1757)に田村藍水が江戸湯島に開設したのをもってその嚆矢とする。珍奇な薬物——動植物や鉱物——を一堂にあつめ、研究発表と情報交換の場とするのが目的であった。啓蒙の意味をかねて一般の人にも公開されていた。翌8年4月に第2回が神田で、第3回は平賀源内が主催して9年8月に湯島においておこなわれた。さらに引きつづき同10年と同12年に松田長元と源内が会主となって会をひらき、この最後の会は薬品会と称した。のちには幕府医学館の主催でもおこなわれるようになった⁷⁾。

その後は各地において物産会が催されるようになり、宝暦13年に京都・東山芙蓉楼でおこなわれた物産会については、木村兼葭堂がその目録をのこしている⁸⁾。

宝暦7年(1757)以降、田村藍水や平賀源内らによって江戸でおこなわれた薬品会は、博物学史上おおいに意味がある。それらの会になが展示されたかは、のこされた出品目録によって今日でもその内容を知ることができるが、その展示の方法はわからない。開催期間も1、2日にとどまり、常設の博物館のような施設は、江戸時代を通じて出現しなかった。

文政元年(1818)におこなわれた薬品会には、玄春の祖父にあたる道周が、その前年に長崎で模写させたウエイスマンの『植物図』を出品して参会者の注目をあびた⁹⁾。

医学館においては毎年4月に薬品会が催されていた¹⁰⁾。はじめは医学館が所蔵する薬品類の虫干しのためにもうけられた行事であったが、その後に江戸市民に展覧することを目的の一つに加えられるようになった。そうなるも館内で蓄えていた薬品ばかりでなく、医師たちが自ら所有する珍品や奇物を出品するようになり、一般の人たちも珍品を所有するものは、医官に出品を託するものも現れるようになった。出品する品物は薬品ばかりでなく、「人首獣皮両頭蛇等ノモノ多シ概ルニ今日ノ博覧会ノ如シ」¹¹⁾であったという。

薬品会を観覧しようと思うものは入場券を必要とした。これは一般に販売するものではなく、医師を通して配布する方法をとっていたので入手はなかなか困難であった。それでも入場者はおおく会場は混雑をきわめ、出品物を破損することさえあったので、医学館の寄宿生徒をその傍らにたたせて見張りをさせていた¹²⁾。

この薬品会の運営にあたっての役割分担はつぎのようであったと「薬品会物品録」にしろされている。すなわち文久3年8月19日におこなわれた薬品会では、鑑定(2名)、世話役(6名)、世話役手伝(5名)、鑑定手伝(16名)、鑑定手伝助(11名)がおかれたとの記録がのこっている¹³⁾。

一方白井光太郎の『改訂増補日本博物学年表』

によると文久3年の条に

医学館薬品会鑑定人、次の如し

井岡渚悦 村田寿庵 野馬文仲 吉田梅庵
岡井元用 増田宗栄 多喜安積 曲直瀬順
正 野間元録 洪江長伯¹⁴⁾

とある。引用した書物については不明なので、原典についてみることはできないのが残念であるが、これらの医師たちをすべて同定することは困難である。

吉田梅庵は一番町に屋敷をもつ二百俵取りの西丸奥医師であり、多喜安積は多紀安听であろうか。野間元録はおそらく野間元琢であろうと思われる。

洪江長伯は『日本博物家年表』をひいた記事として

徳川幕府ノ医官ナリ、寛政十一年薩藩ノ医桀士攻ト共ニ幕命ヲ奉シテ蝦夷地ニ赴キ、草木ヲ採取シ蝦夷草木志料一卷ヲ著ハス¹⁵⁾

と竹岡友三が『医家人名辞書』にのべているように、幕府の御薬園を管理していた有名な人物である。

野間氏会への出席

野間玄琢を中心にして講書の会がひらかれたのは、嘉永3年正月18日である。どのような内容の会合であるか「添田日記」からは明らかにすることはできないが、その後定期的に会合がひらかれている。その表記も日によってまちまちながら、一、六の日に会合がもたれている。はじめは「殿様野間氏へ御出」という表記がみられたが、9月朔日になってはじめて「との様野間氏会へ御出」とあって、これによって通称「野間氏会」という会合が催されていることがわかる。

一、六の日に野間の家に出かけているときは、たとえ「野間氏会」と明記しなくても野間氏会である可能性は否定できない。定期的に会合がひらかれ、都合のつくかぎり出席している様子がう

かがえる。一、六の日以外に野間を訪問している記事は、たとえば

殿様学館江御出、夫より野間氏御悔ニ備物茶折御持参ニテ御出有（嘉永3年4月3日）

殿様、野間氏会江菓子折御持参ニテ、□中見舞ニ御出（同年4月14日）

との様、野間氏会江中元之祝儀として、さとう折御持参（同年7月14日）

のように、その目的が明記されていることがおおい。

嘉永5年にも2月15日にこの年はじめての「野間氏会」への出席がしるされている。その後は出席の頻度が月によってまちまちであるのは、「野間氏会」は毎月定期的に開催されていたが、玄春自身が出席しない日があったとしたほうがいいであろう。この「野間氏会」とはどのような性質の会合か。野間成式を中心にした医書の会読か、医学に関する勉強会であろうとが、成式役後は嗣子の成紀を中心にしてこれが続行されたものと考えられる。さらに後考をまちたい。

嘉永3年の日記には正月18日から12月11日にいたるまで、1年間を通して野間氏会に参加した旨がかかれているので、嘉永4年にも継続して開催されていたものと思われ、さらに嘉永5年におよんでいるので3年間にわたる長期の会合であるといえよう。

野間玄琢成岑は曲直瀬玄朔に入門して李朱医学をまなび、禁裏付医師となって法印まで昇進したが、寛永3年（1626）に徳川秀忠に召されてその侍医となって、隔年に江戸におもむいた。その長男三竹成太の代になってから幕府奥医師となって江戸に住むようになり、以後連綿として幕府につかえた。

玄春と交流のあった成式は安永4年（1773）9月13日の生まれで、寛政6年（1794）閏11月17日に200俵取の家をつぎ医学館教師となり、文化6年（1809）12月に西丸医師となり、同13年広春院の称号をうけた。文政12年（1828）4月には奥医師に昇進して、嘉永3年（1850）4月2日

に死去した。この訃報が添田の家にとどいたのは、翌3日の早朝であった。その日の日記には

早朝野間氏より奉礼到来、但隠居死去之為知也

とある。この隠居とは野間成式である。玄春は医学館から退出ののち、供物をもって野間の屋敷に悔みにでかけた。成式の跡をうけて成紀が当主となり、奥医師となって寿昌院の称号をうけている。

野間の屋敷は「江戸切絵図」によると「野間寿昌院」として下谷御成街道を西にはいった通りにある。玄春の自邸からはおよそ8丁(約880メートル)の距離なので、10分ほどで達することができる。

小野蕙畝との交友

嘉永5年7月2日、小野玄庵が家督相続をゆるされたので、玄春は鯉節を持参してお祝いに向かった。『続徳川実紀』にはこの日の記事として

奥詰医小野蕙畝老免致仕して褒金あり、子彦安家つぐ¹⁶⁾

とある。このとき病床にあった父蕙畝は、翌7月3日夜に79歳で死亡した。彦安はその嗣子玄庵であり、この年54歳であった。

小野蕙畝は有名な本草学者の小野蘭山の孫にあたが、蘭山の死後その後嗣となって小野家をついだ。蘭山同様、医学館における講書と四谷伊賀町薬草植付場所の世話を命ぜられた。四谷薬園については、蕙畝はすでに文化2年ごろから薬草木植付手伝や見回りをして、実質的な作業をおこなって手当銀をうけていたが、ここに正式にその管理をゆだねられたわけである。

小野蕙畝、幼名は佐一郎、諱は職孝、蕙畝は号である。安永3年(1774)の生まれ。祖父の跡をついでから物産者の地位に甘んずることなく医師としての道をめざして、多紀元簡に入門して医学を学んだ。文化9年7月28日には医学館調合役

を命ぜられ、文化12年5月3日には寄合医師に任じられた。文政3年12月24日に医学館調合役を免ぜられて、小石川養生所出役を仰せつかった。文政9年6月22日御番医師となり、天保4年5月3日には御番医師取締手伝となった。

後を襲った彦安(玄庵)は寛政11年の生まれで、諱は職実、医学館講書、寄合医師さらには法印に列せられて、永寿院の号をたまわった。明治6年7月30日、75歳で病没した¹⁷⁾。

玄庵が家督相続をゆるされてから10日後の7月12日に、玄庵の妻百が妹の子どもをつれて玄春のもとに診察を乞うた。「添田日記」には「大病」とあるが、その後の経過については記載がない。

寄合医師になる

「添田日記」の嘉永5年12月8日の条には

御本丸御広敷見習被仰付

とある。この前日の7日七ツ時に玄春のもとに奉書が到着したので、玄春は8日早朝からお供に岩次郎をしたがえて登城した。本丸のお広敷においてお目見を仰付けられたのである。お目見の榮によくしたことを祝って、おおくの人たちが添田家をおとずれた。その面々は溝口氏、馬嶋氏、大石氏、安部氏、長嶋氏、関本氏などである。八百善から仕出をとって祝いの宴をはった。

翌日から各方面へお礼廻りに駕籠ででかけた。9日から始まり、11日、12日、14日、16日と数日におよんでいる。矢の倉の多紀元堅へは15日に、新シ橋の医学館多紀元听のもとへは16日にお礼として鯉節をおくった。

そして12月25日には小普請支配小笠原弥八郎から翌26日に登城するようとの奉書が到来した。その26日の「添田日記」には

医師寄合被仰付候

とある。嘉永元年に父玄成が死去して跡式相続の折に、玄春は寄合医師であった父の職をつぐこと

なく小普請医師となった。父が寄合医師であっても相続した子がかならずしも寄合医師になれるものでないことは、久志本氏の例を『神宮医方史』にみることができる。久志本内蔵家の常澄が跡式相続のさいには、父常元が御番医師であったが常澄は寄合医師に就任している¹⁸⁾。また久志本式部家の常信は寄合医師であった父常伝の跡式相続にさいしては小普請医師になっている¹⁹⁾。しかこれには例外もあった。竹田、吉田の両家は直叙法印、あるいは代々法印の家柄で、相続によって直ちに法印に叙せられる特典を有していた²⁰⁾。また相続人がただちに寄合医師に就任するという代々寄合医師という家柄もあり、井関正伯や岡本玄治などはこれに属する。

この日記にも記載されているが、小普請医師に要求されている療治帖提出の記事が嘉永3年と嘉永5年にみられる²¹⁾。すなわち

療治帳四冊、三浦方へ岩次郎使ニて差出ス
(嘉永3年10月3日)

との様三浦氏へ行、れう治帖三通出す(嘉永5年9月26日)

三浦氏とは小普請支配小笠原弥八郎配下の組頭か世話役であろう。小笠原弥八郎は『袖武鑑』(嘉永6年)によると、4500石小普請支配で居屋敷は浜町にある。この年小普請支配は8名おり、小笠原はこの1人であった。支配の下には組頭1名、世話役3名がそれぞれついている。日記にある「支配」とは実は「小普請支配」なので、玄春はその配下にある小普請医師であることがわかる。

玄春は嘉永5年12月26日に、勤務先の医学館督事多紀氏の推挽によってお目見かかない、それまでの小普請医師から寄合医師に昇格したのがさきの記事である。

将軍家定の死去

安政5年7月7日は天気よかったが、夕方から小雨が降りだした。

上様御不例ニ付当日之節礼無シ、右故登城不

致、夕方小森へ行

と「添田日記」にある。五節句の祝日にもかかわらず節礼を廃するというのは、よくよくのことである。将軍家定の病いが篤く、その病状は今日か、明日かという状況であった。このとき奥医師は漢方医のみで家定の治療にあたっていたが、病状は重篤になる一方であった。このような状況のなかで幕府は蘭方医である伊東玄朴を、往診の途上から拉致するような手荒な方法で営中に招じいれて治療にあたらせた。玄朴は同志の戸塚静海や竹内玄同、林洞海とはかって治療に専念したが、その甲斐もなく家定は7月7日に死亡した²²⁾。

時の大老井伊掃部頭直弼は、時局多端の折からただちに喪を発することなく、将軍死亡の事実が公式に報ぜられたのは1ヶ月後の8月8日のことであった。この日登城した玄春は、家定が巳の上刻に死去した旨を耳にした。それにとまって跡をおそった14代将軍家茂に忠勤をはげむようにとの指示があった。

幕府の公式記録である『続徳川実紀』には、もちろんこの日8月8日に「薨御」した旨が記載されている。

公方様 御勝不被遊候ニ付、為伺御機嫌、御三家方始、惣出仕有之候処、御養生不被為叶、今巳上刻 薨御被遊候段、於席々下総守演達之²³⁾

ついで8月18日にはさきの将軍の葬儀がおこなわれた。葬列は巳の刻に江戸城をでて上野の寛永寺にむかった。その順路については『続徳川実紀』に記載はないが、天保12年の11代将軍家斉の葬列の前例からみて²⁴⁾、おそらく次のような道順をとったのではないと思われる。霊柩は西丸上矢来門より竹橋門をとって竹橋をわたり城外にでる。一ッ橋門をでて、堀端を護持院ヶ原について本多伊予守の屋敷の手前で左におれて錦小路を北にすすみ、小川町にでて、稲葉長門守の屋敷の前通りを右にまがる。土井能登守と青山下野守の屋敷の裏をとって筋違見附にでて、筋違橋で

神田川をわたって御成道を北にすすみ、上野広小路から黒門にはいる。さらに北にすすんで文殊楼前を右にまがり、凌雲院前通りの松原をすぎて、大師堂脇の矢来門の通りから寛永寺龜前堂に安置されるという道筋である。

この日、江戸の市民は物音もたてず、一日中ひっそりと暮らした。外国の圧力が四方からせまっている世情のなかで、市民は不安にかられていたことであろう。その様子を「添田日記」はつぎのようにしるしている。

公方様今日巳刻御出棺、申刻御葬送、門ヲとじタセツ時迄火たかずつつしミ居（8月18日）

お代替りの諸行事

安政5年は日記にある「登城」という文字によって、玄春の勤務先が江戸城であることは明らかである。およそ10日に1度の登城であるが、その間にあっても高嶋祐庵や森宗竹、杉本忠達の交替役として勤務している様子がわかる。また7月28日には医学館に出席しているので、医学館への出仕も旧のごとくであるといえよう。

家茂が14代将軍職をついで、総出仕の登城が安政5年9月28日におこなわれた。9月28日が先代将軍家定の中陰明けの日にあたるので総登城となったわけである。

これにつづいて10月朔日から代替りのお礼登城が3日間にわたっておこなわれ、玄春は10月2日に登城した。この年の新年お礼登城は正月2日であったので、その例にならって2日目の登城となったのである。

その後、代替りの諸行事が華々しくおこなわれている。12月朔日には将軍宣下の総登城があり、さらに2日には「町入能」がおこなわれたが、この日に玄春は登城して陪観の榮に浴したものと思われる²⁵⁾。代替りの諸行事は翌年になってもさらにつづいている。「添田日記」の安政6年6月5日条には

殿様朝六ッ時御代替ニ付、御誓詞ニ酒井右京

助殿御宅ニテ御目付松平次郎兵衛罷越、無滞相すむ、御用番老中へ廻勤致ス

とある。将軍の代替りにあたって幕臣は誓詞を差出すことをもとめられていた。大名は普通、月番老中の屋敷におもむいて誓詞血判をおこなう。旗本や御家人は評定所においておこなうのが慣例になっていた。新任や転任の役人がその任につくときには、役人誓詞、あるいは表誓詞とよんで伝奏屋敷において誓詞血判するのが慣例であったが、時代がくだるにしたがってその状況は変化して、若年寄支配のものは月番の若年寄邸宅において誓詞を提出するようになった。

6月5日のさきの記事は、代替りにあたっても若年寄の屋敷に出向いて誓詞血判をおこなったことをしめしている。すなわちこの日、玄春は馬場先門内にある若年寄酒井右京亮忠毗邸におもむいて、目付松平次郎兵衛清秀の立会いの下に滞りなく誓詞の提出を終了したのである。将軍の代替りからおおよそ1年、将軍宣下があつてからおおよそ6ヶ月が経過しているが、代替りの場合は、役人誓詞とはことなりその数が膨大なのでこのような日数を要したと考えるべきであろう。今日の実感からするとその対応があまりに遅きにすぎると思えるが、誓詞を提出すべき人員がそれだけ多人数であったということである²⁶⁾。

蘭方医との交流

蘭方医との交流については、つぎのような記事が目につく。嘉永元年6月6日条に

伊東玄ぼく来

とあって、その後6月11日、18日にも伊東玄朴が玄春宅を訪問している。大槻俊斎の来訪はさらに頻繁で、親密の度が濃厚であることをしめしている。7月5日には大槻俊斎が来訪し、13日には玄春の弟子の玄理が、大槻宅へ使にいった。そして7月15日には玄理が大槻と伊東の家に菓礼をもってお礼に参上した。その後の交流は

大つき俊斎来（嘉永元年9月26日）
 楽平，大つきへ行（同年10月7日）
 早朝，大つき俊斎来（同年10月12日）
 夜二入とみ，大つき方へ行（同年10月15日）
 大つき俊斎来（同年11月4日）
 大つき俊斎来（同年12月7日）

とある。この日記から交流の内容について明確にすることはできないが、医師としての単なる交流ではなく、7月15日の記事からみて明らかに往診をうけたことをあらわしている。さらに嘉永3年10月9日には「おきせ不快ニ付き大つき呼」とあり、翌10日の早朝にも大槻俊斎の往診を仰いでいる。

この時期、玄春は幕府医学館の講師であるということは、むしろ漢方医学の領域に軸足を置いている医師といってよいであろう。自己の活動範囲の中では漢方医学をけっして無視できない状況にあったはずである。しかし自らの健康に関することになると、オランダ医学を身につけた蘭方医にわが身を託していたのである。医学館医師でありながらこの日記にあらわれる医師の名は蘭方医がおおいところを見ると、玄春にとっては蘭方医から治療を受けることは自然の行為であったにちがいない。

嘉永3年にはつぎの記事がみえる。

麻倉江名物考四之巻一冊かし遣ス（嘉永3年6月10日）
 麻倉江名物考十二部，直不残かす（同年6月11日）

とある。「名物考」と称する書物は二種類あって、一は宇田川玄随の『遠西名物考』であり、他は宇田川玄真・榕庵の『遠西医方名物考』（文政5年）である。前者は未完の稿本（3巻1冊）として現存しているのに対し、後者は12篇36巻、補遺3編9巻からなっていて、同じ著者の『増補重訂内科撰要』に収載されている薬物についての解説書である²⁷⁾。「四之巻」という記述、およびその翌日の「直不残かす」という記述を信ずれば、明

らかに後者ということになる。

『遠西医方名物考』は西洋内科学習のために、新着の蘭書の新知識を活用した西洋薬物百科全書の性格をもつ大冊で、明治初期にいたるまで利用されていた²⁸⁾。玄春の蘭方医学への傾斜の一端をしめすものといえよう。

手塚良庵と池田玄仲の来訪

安政6年6月20日の条は、この日記における手塚の初出である。

殿様手づか宅へ行，菓子折持参（6月20日）
 との様手づか同道ニテ種痘館出席，手づか始テ此方へ入来，ケイラン折持参（6月21日）

手塚が来宅したのはこの日が初めてであるという。かねてよりお互いに顔なじみであったにちがいないが、このときになってはじめて手塚の家を訪れたのだろうか。その翌日に手塚が鶏卵を持参して玄春宅をおとずれた。この手塚が、良仙か、良斎か、はたまた良庵か、この記事からは不明である。しかし良斎の居宅は玄春の邸宅とほんの目と鼻の先の練堀小路なので、それまでの交際を思うとこの日にはじめて訪問したとは到底考えられない。そうであれば小石川三百坂下にすんでいた良庵——この時期、父の良仙光照もいまだ健在で、良庵と同居していた——にちがいなからう。

お玉ヶ池種痘所は安政5年5月7日に開設されるが、このときにその設立資金を拠出したのは江戸にすむ83名の蘭方医や漢蘭折衷医たちであった。そのなかには伊東玄朴や大槻俊斎をはじめ、手塚一族や添田玄春の名がみえる。その模様についてはさきの著書『伊東玄朴とお玉ヶ池種痘所』²⁹⁾においてくわしく論じたのでいまはくりかえさない。

そのさいに手塚一族から参画したのは、良仙と良庵、良斎の3人であったと考えられるが、創立資金を提供した名簿には良仙の名はみえない。種痘所設立の中心人物の1人である大槻俊斎の岳父にあたる良仙も、有力なメンバーの一人にちがいないが、おそらく老齢のゆえをもってあえてこの

挙にはくわらず、長男良庵、婿養子の良斎にその名誉をゆずったものと思われる。

手塚良仙は諱を光照といい常陸国府中藩の藩医である。家学の漢蘭折衷医学を学んで、このころ小石川三百坂下で小児科と産科を開業していた。その長男が良庵で、諱は光亨である。文久2年に父の死後良仙を襲名した。良庵は安政2年に大坂の適塾に入門して蘭学を学び、のち歩兵屯所附医師となって、その取締に榮進した。

手塚良斎は信濃国川中島今里村の内村総兵衛政弘の子で、18歳で江戸にてて手塚良仙光照の弟子となって、のちに光照の次女秀の婿養子になった。このころ下谷練堀小路の大槻俊斎と隣りあわせにすんでいた。良斎も嘉永元年に長崎に留学している³⁰⁾。

ここにいう種痘館とは、もちろん神田お玉ヶ池から移転した和泉橋通の種痘所である。このころ、この施設を「種痘所」とよんだり「種痘館」とよんだりしていた。

安政6年7月4日には池田玄仲が玄春の家をたずねてきた。玄仲は伊東玄朴の弟子の中でも右腕ともいうべき存在で、お玉ヶ池種痘所の留守居役をつとめてその運営の中樞にたずさわっていた。種痘所に正式な俗事役として月岡勝次郎と貝島嘉左衛門の兩人が就任するのは文久元年のことなので、それまでは玄仲が事務方の責任者として種痘所の運営を切り盛りしていた。池田玄仲は10月12日にも来宅している。

玄春は9月11日、10月11日にも種痘所へ出席している。このころの種痘所がどのような態勢で運営されていたのかをしめす史料を目にする機会はないが、定期的に牛痘接種をおこなっていたことはまちがいないと考えられる。

種痘所の火災

安政5年11月15日の「玄春日記」はつぎのよう

昨夜七ツ過、ねりべ小路より出火、大風おき、やうしろ迄焼ケル、

危険を感じた玄春宅では塀を破壊して類焼を防いだ。母や妻おきせ、長女おてつ、長男直次郎は天神下の親戚筋にあたる溝口伊勢守の屋敷へ立ちのいたが、幸い玄春宅は類焼をまぬがれている。おおくの見舞の人がおとずれ、菩提寺である了源寺からも見舞があった。これは『武江年表』11月15日条にのる火事であろう。そこには

一五日暁丑刻、神田相生町の北なる若林氏屋敷より失火し、始めは乾の風烈しく、同所続き武家地へ焼込み、……町小路焼死怪我人算ふべからず。……町数二百五十九町、武家八十余宇なり³¹⁾。

とある大火事であった。出火時間といい、出火場所といい、いささか差がみられるが、このころは日の出をもって一日の始めとする慣習であったので、今日の時制とはいささか食違いがある。それに「暮六ツ」という言葉からみると、「夜七ツ」とはいわず、「夕七ツ」が普通であろう。するとこの「七ツ」は今日でいう午後四時ではなく、夜中の午前四時と考えた方がいいのではないか。これによって「暁丑刻」とほとんど一致していることができる。

この火災によって、この年の5月に完成したお玉ヶ池種痘所も焼失した。種痘は1日も休むわけにはいかないので、翌12月には早くも下谷の伊東玄朴と練堀小路の大槻俊斎の自宅に仮小屋をたてて、ここで種痘を再開した。

溝口の屋敷へ避難した家族は、その日のうちにおきせと直次郎が、16日には母とおてつがもどってきた。17日には見舞にきてくれた人の家々にお礼廻りに出向いている。家におちついた母と子どもたちは、焼跡をみにでかけたという。火事見舞のお礼廻りは18日、19日、21日とつづいている。火災にあたって破壊した垣根は、11月23日から植木屋新八が修理をはじめ、29日には完成した。

翌12月17日の条に

昨夜九ツ比くづれ橋辺出火、との様貞蔵つれ

行、半町斗焼候由也

とある。崩橋とは小網町3丁目の行徳河岸と箱崎町1丁目をむすぶ橋で、『武江年表』にいう

一二月一七日、曉丑刻、箱崎町一丁目より出火³²⁾

の記事と一致する。玄春の自宅がある和泉橋通からみると、かなり遠方ではあるが、おきせの姉がいとなむ「なるかや」のある深川佐賀町の方角にあたるので日記に記載したのであろう。

本丸炎上す

安政6年10月17日の条に

夕七ツ時比出火、御城やける

とある。『武江年表』には

同十七日（申刻）御本丸炎上³³⁾

とごく簡単にかかれているが、『続徳川実紀』には

今夕七時過 御本丸中之口辺より出火致し候³⁴⁾

とあって、このとき將軍家茂は本丸から西丸のお茶屋へ避難したことがしるされている。明暦の大火により焼失し、のちに保科正之によって再建された本丸は、このときまた焼失してしまった。幕府寄合医師という立場の玄春としては、本丸炎上という事件は決して記載しないわけにはいかなかったであろう。本丸は寛永、明暦、弘化、安政と4度の火災により焼失したものの程なく再建されているが、文久3年の5度目の火災後には再建されずに明治維新をむかえた。

文久3年の「添田日記」には火災の記事が面白い。

夜ニ入ゆしま辺大火事（3月16日）

3月16日暮六ツ半ころに本郷新町屋から出火し、西南の風にあおられて湯島天神の拝殿が消失した。この拝殿については

去年修復なりて壮麗の社にて、殊に本社は土庫にてありしが、惜しむべし灰燼となりぬ³⁵⁾

と『武江年表』はしるしている。門前の町屋、池之端茅町や中町を焼いて、夜九ツ時におさまった。

3月19日にもまた火災があった。

夜九ツ半時藤堂家表門向より出火、半町程やける、天神下、永代、京町、内城、三又、市郎、其外所々より見舞人来、永代と溝口家よりむすび到来、藤三郎も中口迄来（3月19日）

『武江年表』には3月20日のこととして

曉八時頃、藤堂侯向ひ佐久間町二丁目火事、半町程焼ける³⁶⁾

と記している。火災そのものはたいして大きくはなかったかもしれないが、玄春宅にもっとも近い火災でなのでおおくの人が見舞におとずれた。

早朝、永代通火事有、松三郎遣ス、上総之手紙届ケル（4月13日）

夜七ツ比飯倉片町出火（6月2日）

この2件の火事については『武江年表』に記載はない。永代にはおきせの姉がいとなむ「なるかや」があるので、すぐに松三郎を見舞に走らせた。

明け方ヨリ出火、西御丸やける、御本丸も少々やけ有（6月3日）

6月3日は南風が激しくふいていた。明け方八ツ時ころに飯倉町続きの芝赤羽の空家から出火し

て、飯倉1丁目から5丁目まで5軒の大名屋敷と17軒の旗本屋敷を類焼して夕八ツ時ころにやっ
と鎮火した大火事であった。そしてその日の夕
方、この火災の飛火によって西丸とともに本丸も
炎上した³⁷⁾。

夜ニ入両国近辺出火、馬喰丁壱丁目より大橋
迄やける(9月4日)

9月5日暁丑の刻に馬喰町1丁目から出火した。
通塩町、通油町、横山町、村松町、若松町あたり
をやき、武家屋敷数ヶ所を類焼して明け方に鎮火
したという。大橋はこのころの大川(隅田川)に
かかる四橋の一つで、浜町と森下町をむすんでい
た。現在の新大橋である。このころ大川にかかっ
ていたのは上流から吾妻橋、両国橋、大橋(新大
橋)、永代橋の四橋のみであった。

直次郎とおていの牛痘接種

元治2年3月22日に玄春の長男直次郎と3女
おていが、医学所で牛痘接種をうけた。その日の
記録をみると

との様医学所へ出る、直次郎、おてい、うへ
疱瘡ニ行

この年直次郎は11歳であるが、おていの年齢は
不明である。

8月7日は玄春が医学所の当番に当たった日で、
医学所において牛痘接種をおこなったことが記さ
れている。

8月19日にも玄春は医学所へ出席した。植疱
瘡を希望して玄春の自宅をおとずれた土岐の娘に
たいして、留守をあずかる執事は「殿様のいる医
学所へ行って種痘をうけるよう」にとの指示をあ
たえている。この日記には牛痘接種についてこれ
以上の記述はないが、文久3年2月ごろの医学所
における種痘の接種状況は緒方洪庵の「勤仕向日
記」にみえる。これによれば診察役、鑑定役、種
痘役、落漿役をさだめて、系統的に種痘を実施し
ている³⁸⁾ので、さらに年がくだる元治2年であ

れば定期的に種痘を実施していたことはまちがい
ないと考えられる。

島村鼎甫に蘭学を学ぶ

殿様ラン学入門ニ貞甫方へ行

これは安政5年8月2日の日記である。ここで
「入門」という言葉を使っているが、この日から
添田玄春が蘭学を学び始めたということではな
い。在来からの蘭方医との関わりをみると、すで
に学んでいた蘭学の不審な箇所について島村貞甫
(鼎甫)のもとに質問におもむいた、ということ
であろう。

この日から3日、4日、5日、6日、14日、15日
と連日「ねり部小路へ行」との記事がつづいてい
るが、15日を最後にして消えてしまうところを
みると、上のような考えが間違っているとは思え
ない。鼎甫が練塀小路に住んでいたことは江戸切
絵図によっても知ることができる。

島村鼎甫は天保元年(1830)の生まれ。嘉永5
年に大坂の適塾に入門し、のち江戸にでて伊東玄
朴の門に入った蘭方医である。阿波藩医で、文久
元年幕府医学所の教授にあげられ、蘭書を翻訳し
て『生理発蒙』(慶応2年刊)、『創夷新説』(慶応
2年刊)と題して世に公にした。

凡人ノ修ムヘキ百科ノ学問ニ於ルモ猶生理学
ノ如キ事実切要ニシテ専ラ闕ヘカラサル者ハ
アラス

の書出しではじまる『生理発蒙』(全14巻)は、
フランスのリバックの著書を重訳した生理学書で
ある。高野長英にはじまる生理学書の翻訳は、こ
れによって江戸時代最高のレベルにまで達した。
生理学総論と各論を詳細にあつかい、この訳書の
出版によって島村鼎甫の名声はとみにたかまった
といわれている。生物電気発生についての記載は
この訳書が最初である³⁹⁾。明治維新後も医学校の
教授職にあり、大学少博士、文部中教授にすすみ、
明治14年(1881)2月25日に52歳で歿した⁴⁰⁾。

安政5年8月13日の「添田日記」に

うら嶋村よりズボイト借ニ来、かし遣ス

とあって、添田邸と背中合わせにある練堀小路の島村からズボイトを借りにきたという記事である。これは浣腸器であろう。

9月21日に今度は島村鼎甫が玄春宅をおとづれた。その翌日22日の夜は島村の弟子がきた。それ以後23日から8回、10月は15回、11月には10回、そして12月朔日、4日と連日のように島村の弟子が来宅している。この島村の弟子とは11月7日の記事によって「藤井」と称する人物であることがわかり、11月28日からは山根桂蔵にかわっている。

この来訪がなにを意味するのか。それをとく鍵として

夜藤井来、御留守ゆへ直ニ帰ル（10月28日）
夜ニ入藤井来、御不快ゆへけい古休、直ニ帰ル（11月13日）

夜嶋村弟子壱人某、代けい古ニ来（11月22日）

「代稽古」云々という字句から、玄春が藤井某や山根桂蔵から蘭学の「けい古」（教授）をうけていることがわかる。また11月3日には10月分の月謝を納めているので、玄春が指導をうけていたことは、これによっても明らかである。

10月14日には

嶋村よりヅウフハルマ為持越、預り置

そして11月5日に

嶋村よりヅウフ金二両為持とりに来、即渡遣

とあることによって、玄春が嶋村からドゥッフハルマを2両で譲り受けたことをしめている。

蘭学を教授する

安政6年正月9日に

島村より手紙付ラン学書生一人来

とあり、その翌10日も

ラン学書生村田桂平と申すもの今日より来

とある。おそらくこれは同一人物であろう。島村鼎甫からの紹介状をもった村田桂平が、玄春に蘭学を学びに来たことをいうのであろう。鼎甫も蘭学は堪能であったが、その鼎甫からの紹介で学生が玄春のもとに蘭学を学びにきたというのは、鼎甫が玄春の語学の才能を認めてのことであろう。

元治2年8月26日、大久保松次郎なる人物が、蘭書の講読をうけるために玄春のもとに弟子入りを希望してきた。大久保はその翌日の27日から、連日のように玄春宅へ教えをうけにきて、12月8日までのおよそ100日間に35回にも及んだ。この大久保なる人物についても、蘭書の内容についても記載はないが、玄春が蘭書を読むことができたこと、読むだけでなく教授できる力量を具えていことをしめしているといっていよいであろう。

同年10月19日には高嶋に蘭書を貸した。この高嶋とは、高嶋祐敬であろう。これは玄春がいくばくかのオランダ語の書物を所有していたことをしめしている。オランダ語の読解力が徐々に具わってきているといえよう。

玄春がオランダ語の書物を所有していたという事実は、

上原セン五郎ラン学よみニ来（安政6年2月14日）

という記述にもみることができる。ここの「ラン学」というのはおそらく蘭書の誤りであろう。上原セン五郎が玄春の所蔵する蘭書を見せてもらいにきたということである。その翌日も上原は来訪している。

患者に処方するための薬品を購入している様子も、この日記からうかがえる。嘉永3年2月29日の条には

セン薬、タンネ買入。

とある。セン薬とはセンナのことであろう。タンネはあるいはタンナルビンか。

安政5年7月25日の条には

おさきの薬カルメルザイ出ス

とあって、甘汞（塩化第一水銀）が処方されていることをしめしている。

安政6年8月23日には永代の鳴加屋から使にきたおみちに、上総のおきせの実家へおくるコロomboを調べてやった。「虚弱ヲ強壯シ胃腸ヲ健運シ腐敗ヲ防止シ粘滑質ヲ含テ緩和鎮痛ノ効アリ」というコロomboをあたえたのである。この薬は霍乱やコレラにも効果があるという珍重されていた⁴¹⁾。

同じ年の8月13日には薬屋へ薬品を見に行っているが、はたしてこの日に購入したのか、それについてはふれていない。8月17日には「セメン二升買入ル」とはっきり薬種の名称をあげられており、同27日には沢田屋からキナを一升購入したとある。10月24日には桂皮を仕入れているが、購入薬品は蘭方薬がおおいことをしめしている。

購入先の薬種屋はさきの「沢田屋」のほかには、安政5年8月11日に「昼後本所ひのやへ薬種かひニ行」とあるように、この二カ所の屋号が記載されている。

村田蔵六による小塚原の腑分

安政5年12月4日の条に

殿様並ニ藤井、表之もの共、犬のふわけ致ス

とある。このころ人体解剖がきわめて困難であったので、腑分に関心をもったおおくの医師は動物を解剖して人体の腑分を代行していた。

……猫、犬等を屠り、之れを図に照し刀を執ること大略一ヶ月に数回、斯くの如くするこ

と数年にして始めて其要を解得す⁴²⁾

と人体を解剖することがいかに困難であったかをしめしている。わが国ではじめて人体解剖をおこなってその記録『蔵志』をのこしている山脇東洋がカワウソの解剖をおこなったのも、この動物の内臓が人体のそれに似ているからという理由であった。玄春をはじめ弟子の藤井玄洋、そして医学の修練に励んでいた弟子たちもイヌを解剖している様子が「添田日記」にみえる。

しかしイヌの腑分では医師としての知的好奇心を満足させるわけにはいかないので、人体の腑分があるときけば機会をのがさず、早朝から参加している。安政6年10月6日には

早朝との様こつか原へフワケニ行、御供貞三行、夜ニ入帰

とあるように早朝から千住の小塚原にでかけ、夜になるまでじっくり腑分を見学した。88年前、杉田玄白たちがたどったと同じ道を通して小塚原まで出向いたと考えられる。この腑分について中野年表には安政6年の欄に

一〇月 種痘館、官ノ許可ヲ得テ小塚原ニ女刑屍ヲ解剖ス。大村益次郎、種痘館ノ嘱ニ応ジテソノ陰部ヲ解キ内生殖器ヲ精シク剖示ス⁴³⁾

とあるが、中野操はその日を特定していない。「明治前日本解剖学史」には

適々塾に学んだ村田蔵六（後の大村益次郎）が解剖に精進した話が今日に伝えられている。安政六年十月には村田蔵六は江戸骨ヶ原に於て種痘所の請により女刑屍を解剖したことがある⁴⁴⁾。

とあるが、ここでもその日は特定されていない。

また『防長医学史』には大村益次郎が慶応三年秋に山口でおこなった解剖の事蹟をしるした後に

大村は……大阪の緒方の塾や伊予の宇和島に在任中は、たびたび動物の解剖をこころみ、さらに江戸に滞在中には、安政六年（一八五九）十月に幕府の種痘所（のちの西洋医学所）の依頼によって、小塚原刑場で女の解剖を行ひ、その妙技を喧伝されたことがあった⁴⁵⁾。

とのべている。この年の腑分は、種痘所が官許をえて行った教育のための解剖であるが、どの書物を見ても解剖が行われたのが10月とあるのみで、その日が特定されていない。

なぜ腑分の日が特定されずに、このような記載が流布したのだろうか。そもそもことの発端は村田蔵六の門下生であり、塾長でもあった嵯峨寿安の事実談にあるのではないかと思う。解剖当日村田蔵六にしたがって解剖にあたった嵯峨寿安は、解剖の様子を詳しくかきのこしているが、これには月日が明記されていないのである。すなわち

安政六年十月信州無宿の一婦斬に処せられたり、年三十七八体格強壯にして在獄年余に涉りしと雖ども衰色なきほどなれば、解屍には屈強の者なりき、西洋医学所より官に請ふて小塚原の寺院に解屍の事を行へり、此際先生医学所の囑に応じて夫れの陰部を解く⁴⁶⁾、

とある。これにつづいて当日の村田蔵六の風采容貌を克明にかきしるしているので、かれがこの解剖に参加していたことは明らかである。臨場感あふれる記事でありながら、たまたまその日付が記載されいなかったばかりに、今日にいたるまで特定することができなかった。

大槻俊斎が文久元年8月に幕府に提出した「医学解剖儀ニ付奉願候書付」において、

解剖之儀西洋医学術之基礎ニ有之本道之下科其外科共初心之者は勿論医術熟練之者といへども少なくとも一年兩三度づゝ親敷剖観不仕候而は医術研究に不相成候⁴⁷⁾

とのべているように、1年に2、3度腑分けをお

こなうことさえおぼつかない状況であったことをみれば、玄春が小塚原でみた腑分けはこれらの諸書にとりあげられている村田蔵六の腑分けであることは間違いない。在来から10月であることは明かであったものの、その日となるとまったく不明であったが、この「添田日記」によってそれが安政6年10月6日であることを明らかにすることができた。

医学所での勤務

玄春は医学所と江戸城での当番を精力的にこなしている。元治2年3月13日には早朝から当番として登城しており、昼四ツ時には医学所に出席するという精勤ぶりである。

医学所においては牛痘接種をおこなうほか、医学教育機関としての性格をそなえているので、医学所勤務の医師の間で医学研究も行われていた。元治2年2月8日の条に

との様医学所へ会読ニ行

とあって、その書物の種類は不明ながらも、今日でいう抄読会や集談会のような会合がおこなわれていたことをうかがわせる。

文久3年以降は頭取に就任した松本良順の意向によって、ポンペが長崎で行った教則にしたがい物理、化学、解剖、生理、病理、内科、外科を「医学七科」として医学所においても系統的な教育を行うようになっていた。医学所はもはや単なる牛痘接種の施術所ではなく、医学教育を中心にすえた西洋医学の教授所としての名に恥じない存在になっていた。

玄春と緒方洪庵との出会い

緒方洪庵と添田玄春の最初の出会いはいつか。「玄春日記」における洪庵の初出は文久3年正月19日である。「緒方洪庵表座敷見ニ来」とあって、洪庵が添田邸の下検分にきたことをしるしている。

一方洪庵の「勤仕向日記」における玄春の初出は文久3年正月7日で、玄春の長崎留学が決定し

た日の記事である⁴⁸⁾。しかしこれ以前にまったく交渉がなかったとはかんがえられず、洪庵が江戸に下って西洋医学所頭取に就任した文久2年閏8月4日以降、この両者は職場を同じくする頭取と医師としての交際があったものと考えられる。それ以前から医学所医師として勤務していた玄春が、大槻俊斎の歿後にその後任として頭取に就任した洪庵をむかえたと考えるのが妥当であろう⁴⁹⁾。

単身赴任の洪庵にとっては一日も早く妻子を大坂からよびよせたいと願っていたが、家族が落ちつける役宅が完成しないことにはどうすることもできなかった。およその完成日を予測してはやく出府するようにと大坂にいる妻八重あてに催促の書状をしたためる一方、役宅が未完成の場合も想定して、家族の落着く先として医学所の近隣にある玄春邸の表座敷を借りうける心づもりをもっていた。

たとひ成就に不相成とも、此度長崎へ下り候添田の宅近所にて広く候故、事により借り可申やうそくのいたし置候間、心配の及ひ不申、用意さへ調候は、早々出立可被致候⁵⁰⁾

とさきの八重あての書状にある。たとえ役宅が完成していなくとも西洋医学所に近い添田邸を借りうける約束をしているので、心配なく早々に大坂をたつようにと促している。

玄春の長崎留学

玄春にとって文久3年のもっとも大きな出来事は長崎留学であろう。この年の最大の出来事であるばかりでなく、玄春の一生においても最高の経験であり、その後の人生の軌跡を決定する重要な体験であったにちがいない。

医学所から明日御用の義があるので出頭するように、との達しが玄春の手許にとどいたのは文久3年1月6日の夜のことであった。そこで翌7日あさ五ツ時に医学所に出頭したところ、長崎医学伝習の指示があって、明日四ツ時に御城へ出頭するようにとの達しをうけた。

玄春の長崎留学が許可された文久3年正月からは、この洪庵と玄春はとくに頻繁な往来があった。「勤仕向日記」には出発前の多忙な様子がつぎのようにえがかれている⁵¹⁾。

明八日添田玄春御暇にて御用召之事可達旨、丹波殿被仰渡よし、十郎兵衛より達ス。帰宅後、早々同人へ達す(正月七日)。

伝習行五人、良順、宗端、元春、玄庵、洪斎之御朱印下書 北角より相渡(正月九日)。

川嶋宗端、添田玄春、竹内玄庵

右三人、此度、良順同道、出立。陸路長崎へ罷越候様被仰付。(正月十五日)。

医学所十兩已下之御買上もの伺書並添田玄春御取米願書北角十郎兵衛へ差出ス。(正月十六日)。

玄春が御朱印を拝領するなど、出発前の諸手続に多忙をきわめている様子は「添田日記」にもみえる。すなわち正月6日条に

医学所より明日御用之義ニ付可罷出旨達来、請書遣ス

とあって、新しい特別な仕事が目前にあることを思わせる。翌正月7日五ツ時に玄春が医学所に出頭したところ、長崎医学伝習の内意がつたえられた。それからあわたたしい準備の日々がつづいて、正月21日に「勤仕向日記」の記事とは異なり単身で陸路をとって江戸を出発した⁵²⁾。玄春の長崎留学には洪庵の強力な推挙があったにちがいないが、玄春の蘭学がそれに値するだけの力量もっていたからといってよいであろう。

玄春 江戸をたつ

添田玄春は当初の予定とは異なって、陸行に変更された。玄春の出立の様子は「添田日記」によれば文久3年正月20日に「先ぶれ」をだし、この日緒方洪庵が面会に訪れて壮途を祝してくれた。

翌正月21日の朝、玄春はおおくの人々に見送られて長崎を目指して江戸をたつた。この日空は

晴れ上がって、幸先よい旅日和であった。新八、きくなどの使用人は芝口まで、清水玄洋、又四郎、秀次郎は品川まで見送りにいった。玄春の妻の実家筋にあたる江沢氏などは、神奈川まで見送って別れを惜しんだ。奥の細道の旅にのぞんだ芭蕉を見送って、別れを惜しんだ弟子たちの姿を彷彿とさせる光景である。

門出に先立って玄春は、弟子の藤井玄洋を留守中の代診医に指名した。

藤井玄洋此度御留守中代シン申付ル（正月17日）

とあり、翌日はそのころの幕府医官は法体になるという慣習にしたがって、玄洋は剃髪した。

藤井玄洋てい髪致ス、留守中のれう治頼候旨申渡（正月18日）

とある。

玄春の代診といっても官医となってお城にあがるわけではないが、私的な治療をおこなう場合でも幕府医官添田家の代診としての権威をたもち、威儀をただしている様子がうかがえる。

この日記は江戸にいる添田家の執事が筆をとっているのだから、長崎における玄春の様子については記述がすくないのは残念である。玄春、竹内玄庵の2人が長崎に到着したことを2月20日付緒方洪哉の書状によって洪庵は承知している⁵³⁾が、その日は明記されていない。

洪庵は玄春からの書状によってもそれを承知しているが、残念ながらその書状は現存しない。さきの洪庵の書状の一節に

添田は着早々書状被差越、此頃相達し申候、宜ク挨拶頼入候⁵³⁾

とあって、それが裏付けられるものの、その日を明記した文書は存在しないので、「添田日記」によって長崎到着が2月19日であることを明らかにすることができた。

玄春の長崎での動静

「添田日記」には玄春からときおり長崎からの便りがあったとするすのみで、どのような生活をおくっていたかについてはまったくふれられていない。

天神下より使来、大坂より二月七日出之殿様より之手紙油紙包届、四日ニ草邸へ着之由也（3月1日）

殿様の御供ニ頼ミ行候、竹之内之家内茂介帰来、との様二月一九日に長崎へ着致候よし、茂介ハ蒸気船ニ乗二月二八日ニ出帆致候由也、御状持参（3月9日）

長崎より之手紙、医学所より届（4月21日）
竹内へ長崎行書状為持遣、菓子折遣ス（4月27日）

早朝長崎之手紙持参にて文桂ト申人来、奥へ通遣ス（5月16日）

長崎留吉方より之状、くうじ丁松本より届（5月30日）

これをみると書状の往復は、医学所の公用便を利用していたのではないかとおもわれる。おそらく江戸と長崎をむすぶ公用便が定期的に運用されていたのであろう。このころの江戸と大坂は、船便によって3日から6日ほどで結ばれていた。

玄春の長崎留学が正式に発令されたのは文久3年正月7日であり、諸準備がととのって出立したのが同じ月の21日であった。その前年の冬から留学が決定していた川嶋宗端らについては、洪庵ものべているように

伝習之人々出立色々間違、大ニ延引と相成⁵⁴⁾

とあって、江戸を立ったのは翌文久3年正月であった。以前から留学が決定していた川嶋らにくらべると、玄春の出立は順調にはこんだものといえよう。

その後になると

此節柄故伝習御用も如何成り行き可申歟、相分不申、兼而覚悟無之ては不相成、能々心得居被申度候、此頃寄合御医師上領玄碩、小普請御医師坂上池院兩人伝習願差出候へ共、此節柄見合可申旨ニて、願相叶不申候⁵³⁾

との3月晦日付の洪庵書状にあるように、最早長崎伝習がおこなわれなくなるので、玄春の長崎伝習はまことにより時期に決定され、速やかに出立できたものといえよう。

玄春が長崎においてどのような医学を学んだのか。それをしめす史料はないので、そのころの長崎の状況から判断しなければならない。

長崎における医学伝習については、おおくの先学の研究があるので詳細はそれにゆずる。ポンペによっておこなわれていた系統的な医学教育は、その後任となったアントニウス・フランシスクス・ボードインにひきつがれて、そのカリキュラムによっておこなわれていた。

しかし玄春の長崎留学は、わずか3ヶ月という短期間で帰府しなければならない悲劇にみまわれた。その前年に発生した生麦事件によって、わが国とイギリスとの交渉がゆきづまり、ついに戦闘必至という状況においこまれた。そのため長崎奉行大久保豊後守忠恕と服部長門守常純は、文久3年5月、養生所のボードインはじめ、製鉄所の造船師、造営師に帰国をもうしわたし、また医学伝習の松本良順ほか6名に帰府を命じたという⁵⁵⁾。騒然とした空気が長崎にもみちみちていたことがわかる。

この時期松本良順が長崎に滞在していたが、その目的は医学伝習ではなく、長崎医学所の校内紛争をおさめることにあった。良順は見事その目的をはたして江戸へかえり、緒方洪庵が文久3年6月10日に急死した後をうけて医学所頭取に昇格するが、それはおよそ半年後の12月26日であると思われる。

ボードインの兄にあたるアルベルトゥス・ヨハネス・ボードインの文久3年3月26日付書状によると、日本とイギリスの間でたぶん戦争がおこるだろう、そのときには自分は上海に避難する予

定だ、とされているにもかかわらず、5月2日付書状には長崎は平穏なので医学校の講義を再開したとある。この書状について報告した石田純郎は、

五月二日まで長崎医学校はしばらく休校を余儀なくされていただろう

とのべているが、休校がいつから始まったかについての記述はない⁵⁶⁾。尊攘派の圧力によって幕府は攘夷開始期日の決定をせまられ、その日を文久3年5月10日とすることを布告したが、当の幕府もこれを実行する意志はもっておらず、また到底実行できる状況ではなかったにもかかわらず、この布告にもとづいてボードインの講義が中止においこまれた。

新潟医学校長竹山屯の『医事雑記』に収録されている「ボードイン先生口述」の跋文——この跋文の筆者は奥山玄省である——に

今ここに五月、官は外夷拒絶の命を報じ、ついにボードイン氏の伝習を辞す、ここにおいて官医および諸藩医ことごとく皆雲散す⁵⁷⁾

とある。講義が中止されたことによって幕府や諸藩から留学していた医師たちは、長崎をあとにして各地へ散っていった。この筆者である奥山玄省もまた、ボードインの講義や臨床実習に参加する機会をうしなった。玄省が「此実ニ千載ノ遺憾ナリ」と述べているように、玄春も同じ思いをいだきながら急遽留学を切り上げて帰府したのではない。あまりに短期間に終わった玄春の長崎留学の裏には、このような事情があったものと考えられる。

長崎を退去しなければならないといわれながら、ボードインは幸いにそのまま長崎に残留することになった。しかしさきの幕命によって伝習生たちは長崎を立ち退いてしまったので、教師がいながら生徒が不在という奇妙な状況が生じてしまった。そこで幕府は文久4年になって、あらたに長崎医学伝習生として大槻玄俊はじめ8名の医

師を派遣した⁵⁸⁾。このなかに緒方洪哉や戸塚静珀（のちの文海）、竹内玄庵（のちの正信）の名はみえるが、添田玄春や川嶋宗端の名はない。いかなる理由によるものかは不明ながら、不幸にも選にもれてしまったのである。

これまで長崎に派遣された医師たちのうちには放蕩するものがおおく、紅灯の巷に足をふみいれて借財を重ねているので、外国奉行としては医学伝習生を長崎に再派遣することには反対のむねを老中に申し立てている。しかし松本良順は折角優秀な蘭医ボードインが長崎に滞在しているのに、伝習を中止するのは国家のためにおおきな損失であると判断して、老中に再派遣をつよく要請した。そこで老中もこの提案を了承して人選をきびしくしたため、玄春や川嶋宗端、奥山玄省は不幸にも選にもれてしまったと考えられる。もちろんこれらの人たちがさきの基準に抵触していたとは考えられないが、一方緒方洪哉や戸塚静珀、竹内玄庵などは再留学の選にもれることはなかった。これらの人物の係累をみるといずれもそうそうたる毛並みの持ち主で、強固な縁故をもったものの強みといえようか。このときに派遣の選にはいった池田謙斎や松本銈太郎のその後の華々しい活躍をみると、長期にわたる長崎留学はその後の留学生の人生におおきな影響をおよぼしたということができよう。

長崎からの帰府

玄春が長崎留学をおえて江戸へむけて出立するとの知らせは、文久3年6月16日に留守宅に到達した。大槻玄俊のもとにもたらされたこの知らせでは、出立の日時についての記載はないものの、これが江戸に到達した時には、玄春はすでに長崎を出発していた。玄春が江戸へ帰府したのは、洪庵が急死してから10日ばかりたった6月23日である。この日の「添田日記」には

早朝先ふれ持参、殿様板橋御昼飯の由申来、
右の人へ朝飯為食戸朱渡

とあって、玄春が中山道を經由して帰府し、中食

を板橋宿でとるむねの知らせが6月23日の朝に留守宅に届いた。この知らせをうけて、知人や雇いの人びとが板橋まで迎えに出て、玄春は七ツ時に無事帰宅した。この日大槻玄俊、緒方洪哉、戸塚静珀も同道で長崎から帰ってきた。

翌24日には、長崎へ出立にあたって拝領した留学の朱印状を、竹内玄同のもとに返納にでむいた。同じ日玄同と戸塚静海は同道で玄春の労をねぎらいに玄春宅まできれくれた。その後川勝をはじめおおくの知合い縁者に、長崎の土産をくばっている様子が日記に記されている。

玄春が江戸を留守にしたのはおよそ5ヶ月である。しかし往復の日数を考えると長崎滞在は3ヶ月ほどの短時日である。この間どのような医学伝習がおこなわれたか、この日記からはまったくすることはできない。

物情騒然としていたこの時期、その状況は江戸においても同様であり、市中において物騒な事件が頻発していた。その様子は「添田日記」にもみえる。

昨夜より両国ニロウ人中間之由、きり首二ツ
ごく門台こしらへ懸有、とがの次第一枚板に
認有、進之介、玄洋、松三郎見ニ行、昼後御
前様、おきせも見ニ行（文久3年4月10日）
馬喰町又本所辺ロウ人乱ぼう致候ニ付、しず
めの由御役人着込はら巻等ニテ出候由、本
町、辺木メ有之大さわぎ、表之者共見ニ行
（同年4月15日）

この様子は『武江年表』にもものっており、4月の記事として

此の頃、浪士徘徊して辻斬り止まず。両国橋畔には其の徒の内犯律のよしにて、二人の首級をかけて勇威を示せり。所々閭閻ありて、穏ならず⁵⁹⁾。

いかに江戸市中の人々が浪人の跋扈になやんでいたか、その様子が克明に描かれている。世情の状況の記事に乏しいこの日記にもこのような記事

が載っているのは、乱暴狼藉をはたらく人の話題が人々の口の端にのぼっていた証左であろう。

玄春の医療活動

との様学館へ出席，昼後元康へ不快見舞ニ菓子折持参（嘉永5年4月24日）

この当時の「見舞」とは，現今とは異なって往診を意味する。菓子折を持参しているが，親しい仲間なので診察のついでに手土産を持参したといった方がいいだろう。

現今いうところの見舞は，この当時では「病氣見舞」とかく場合がおおい。単に「見舞」と書かれているときは，今日でいう往診にあたる。とくに医師の見舞という場合には，往診としてさしかえない。このような使用例は明治時代になってよく見受けられるところである。

嘉永5年8月15日，玄春は堀石見守の屋敷に往診にでかけた。堀石見守親義は信濃国飯田藩一万七千石の藩主で弘化2年（1945）9月に先代親宝（ちかしげ）のあとをおそって藩主の座についた。親宝は堀家最高の名君といわれ，天保14年には老中格まで昇進した。このころ親義は奏者番の任にあり，のち元治元年9月には講武所奉行に就任した。上屋敷は向柳原にあり，玄春の屋敷からは至近の距離にあった。

旗本ならいざしらず，大名家においては自らの侍医をかかえているはずだが，玄春が往診におもむいたというのはどういうことであろうか。この辺の事情はまったく不明ながら，幕府医官という肩書きを有する玄春を招いて自らの家中の医師たちと対診させたのであろう。この日記の「堀石見守」との記述を信用するかぎり，以上のような解釈が妥当であるといえよう。

大名家への往診のほかに，町屋への往診もみられる。そのいくつかの例をあげると

との様きば太田や見舞（安政5年8月25日）

との様さへぎ町名主忠次郎へ見舞（同年10月朔日）

との様御当番，御退出後本所相生町辺病家見

舞（同年10月23日）

相生町の病家へは11月5日にも往診おこなっている。

との様岡本御同伴ニテお出有，早朝菅野へ御見舞有（嘉永3年8月21日）

殿様学館へお出，夫より菅野へ御見舞有（同年8月23日）

そして菅野への往診は翌24日，26日にもおこなわれてた。この菅野とはおきせの姉多勢子の嫁ぎ先である。

殿様大石氏の御頼ニテ疱瘡病家へ行（嘉永5年閏2月21日）

との様御病家番町辺へ行（同年5月19日）

などの記事もみられる。

さらには自邸においても診療している記事がある。すなわち

弁慶橋かざりや惣次郎倅りようじに来，上記の様体ニテ此方ニ罷候内，ひきつけ候ニ付奥へ通し世話致遣ス，無程ひらき付宿より兩人斗来，即刻帰ル，同所より夜ニ入九ツ少し前比迎ひニ来，早速との様行，御供謙吉行（安政5年8月17日）

かざりや惣次郎の倅が治療をうけにきていたちょうどその折に「ひきつけ」をおこした。治療によって痙攣が治まったので，一旦は自宅にかえしたが，その後容体が悪化したとの知らせをうけて早速往診にかけつけた。そしてこの日から連日往診がおこなわれている。

朝，かざりやより薬取ニ来，との様直ニ御見舞（同年8月18日）

との様登城，御帰り後かざりやへ見舞（同年8月19日）

19日は雨であったが、お城での務めをおえてからかざりやへ往診におもむいた。

との様かざりやへ見舞、夫より浅草へ参詣
(同年8月20日)

翌20日も小雨勝ちの天気であったが、かざりやへの往診の帰り道に浅草の観音様へ参詣した。玄春はその後22日、23日、26日に往診をしている。その甲斐あってか倅は全快し、9月4日にかざりや惣次郎は倅をつれて、添田邸に本復のお礼にやってきた。

玄春は医学所や医学館に勤務する医師であり、本務は幕府医官としての公務をもった医師である。自宅での診療や往診はあくまでもサイド・ビジネスなので、自邸蟻動館が町医のように表と奥とに峻別されていたわけではない。そのために来院した患者にたいしては奥へ通して診療していた。むしろ表向きは自宅での治療は好意によっておこなわれていたことをしめすものであろう。つぎの記事もこのことをあらわしている。

山城や佐兵衛倅耳痛候由ニテ願ニ来、奥へ通し見テ遣す、薬も出(安政5年8月3日)

コレラの流行

此節何病記等とも不知レ人多ク死ス、茂兵衛来咄しニ永代店先ニテ見てこれ数いたし候処、兩日之内ニ百八十程とむらひ通行いたし候由、此門前も多ク通ル

これは安政5年8月8日の「添田日記」である。茂兵衛とは永代にあるなるかやの関係者であろう。この年長崎からはじまったコレラの流行は、初秋には江戸にまでおおよび歴史にのこる大流行となった。一日に百も二百もの棺桶が町を行きかったという記事は、おおくの書物にみえるところである。『武江年表』にも7月末からの大流行を事細かに記述している。そこには

八月朔日より九月末迄、武家市中寺社の男

女、この病に終れるもの凡そ二万八千余人、内火葬九千九百余人なりしと云う⁶¹⁾。

とある。このときにどのくらいの人がこの病の犠牲になったかについては、諸書によってまちまちであるが、山本俊一は

江戸におけるコレラ死者数については、次に示すように多くの記録があるが、いずれも不完全であり、また信頼性も十分でなく⁶¹⁾

とのべて、「橘黄年譜」や「嘉永明治年間録」『武江年表』などの数字をあげながら、これらの諸書を勘案して「したがってその実数は三―四万の程度」と推測している。

茂兵衛の話ばかりでなく「此門前も多ク通ル」とあるように、玄春邸の門前通、すなわち和泉橋通も数多くの葬列が行きかったことを記している。

その3日後の8月11日の条に、自らの眼で見た情景をしるして

今日もおびただ敷、ともらひ通ル

とあって、流行の激しさをうかがい知ることができる。

この大流行に民衆はなす術をしらず不安にかられていた。医療に頼ることができなければ、あとは神仏の加護にすがるだけである。安政5年9月4日の「添田日記」にも

病流行に付市中しし並ニ御ミコシかつぎ廻る

とあり、これを直次郎が見物にいったという。このような民衆の動きにたいして、安政5年8月寺社奉行は次のようなお触書をだして鎮静化をはかった。

神輿獅子之頭類多人数にて持歩行候儀も有之由相聞候、右は病災を可逃との心得より右体の所業致し候義とは相聞江候共……以来神輿

其外之品借受候義氏子等より相願出候とも決して差出申間敷候⁶²⁾

とあるが、これではたして効果があったのであろうか。「添田日記」にあるこの記事が9月であることをみると決して沈静化したとは思えない。

添田家では幸いにもコレラ患者は出なかったようである。コレラに関する記事はこの程度で、診療がとくに忙しかった様子がみえないのは不思議である。

文久3年にもコレラの流行があった。『武江年表』には

同月(七月), 暴瀉病少しく行わる。死亡の者去年の半ばより少し⁶³⁾。

とあって、前年の文久2年より患者は少ないものの、記録にのこる発生をみている。「添田日記」にも8月4日の条に

山谷来、殿様見舞遊、葉遣ス、家内コロリの由也

とある。昵懇にしている山谷の家内がコレラに罹患したので玄春が往診をした。添田家の身边にもコレラの流行が忍びよっている様子がみえる。

おわりに

「添田玄春日記」をとおして幕府寄合医師である玄春の公的生活の一端をえがいてみた。これによって江戸時代の医師が、いかに自らの医学を学習し、医療を形成したか、その努力の跡を垣間見ることができたのではないかと思われる。私的生活においてはそれなりに楽しみをもちながらも、公的生活においては幕府医官としての権威をたもって、けっして妥協しない精進をつづけた生活をおくっていることを明らかにすることができた。

本稿の要旨は「江戸幕府寄合医師添田玄春の医学と医療活動」として日本医史学会3月例会(2002年3月23日)において発表した。

注と参考文献

- 1) 添田玄春日記 順天堂大学医学部医史学研究室 山崎文庫蔵
- 2) 添田玄春の個人史や個人的な日々の暮らしについては 深瀬泰旦. 江戸幕府寄合医師添田玄春の日々の暮らし. 川崎市小児科医会会誌 2001; 33: 3-33 において報告した. なおこれは後に深瀬泰旦. 天然痘根絶史. 京都: 思文閣出版; 2002. p. 204-254 に収録された.
- 3) 慎徳院殿御実紀 続徳川実紀 二篇 東京: 吉川弘文館; 1976. p. 608
- 4) 森潤三郎. 多紀氏の事蹟 (復刻版). 京都: 思文閣出版; 1985. p. 165-175
- 5) 旧幕府医学館ノ設立及同館ノ形状. 日本教育史資料 七 1890. p. 642-644
- 6) 幕府医学館の教育要員の名称については各種の史料によってまちまちであり, それらを比較検討することもなかなか困難である. それぞれの史料が使用している名称をあげておく.
館主, 教諭 (『日本教育史資料』)
館主, 総理, 都講, 教授, 弁事 (多紀元堅『時還読我書続録』)
館主, 総理, 都講, 教授 (今村亮「医学館記」)
督務, 教諭, 助教, 助教介, 素読教授 (滄海老人「躋寿館遺事」)
館主, 教諭, 講師 (森潤三郎『多紀氏の事蹟』)
- 7) 白井光太郎. 改訂増補日本博物学年表. 東京: 大岡山書店; 1943. p. 63
- 8) 兼葭堂雜録 二之巻. 日本隨筆大成第1期 14巻 東京: 吉川弘文館; 1975. p. 69-71
宝暦13年4月15日に東山芙蓉楼において物産会がもようされた. 会主は鑑古堂と不稟斎である. 象の皮, 穿山甲などの動物, 竹や柳などの植物, 菊文石や代赦石などの鉱物など, 合計240余種の品物が収載されている.
- 9) 島田筑波. 隠れた蘭方医添田道周. 史蹟名勝天然記念物 1929. 4巻 p. 335-344
- 10) 当初薬品会は春秋二回開かれていたが, 幕末にいたって4月18日と19日の年1回になった. 初日は医官の子弟の縦覧する日とし, 2日目は一般に公開されたが女性の入場は許さなかった.
滄海老人. 躋寿館遺事. 継興医報 1896; 34号 p. 21-23
- 11) 薬品会之事. 日本教育史資料 七 1890. p. 644
- 12) 滄海老人. 躋寿館遺事. 継興医報 1896. 35号 p. 24-27
- 13) 波多野賢一. 医学館補遺. 中外医事新報 1933; 1197号 p. 279-291
- 14) 白井光太郎. 前掲書 p. 283
- 15) 竹岡友三. 医家人名辞書 1931. p. 499

- これについては呉秀三、徳川時代に渡来の外人と学術上に接触したる日本人（十一）、日本医史学雑誌 1928；1138号 p.401-408 にくわしい。
- 16) 慎徳院殿御実紀 続徳川実紀 二篇 東京：吉川弘文館；1976. p.691
- 17) 遠藤正治、本草学と洋学 小野蘭山学統の研究 京都：思文閣出版；2003. p.125-153
- この薬園は8年にして閉鎖され、医学館附属番町薬園に移転した。なおこれと併存していたのが渋江長伯の薬園である。
- 18) 久志本常孝、神宮医方史 1985. p.170
- 19) 同書 p.151
- 20) 藤浪剛一、徳川幕府医官家督と任官、日本医史学雑誌 1941；1293号：288-192
- 21) 療治帳については「明良帯禄」（『古事類苑』方技部十医術一 p.723）に
- 小普請医師是も医術修業之道にして、小普請組之支配也、屋敷並町方の病人有時、薬を与ふれば、療治帳とて、病人之名何之誰、家来何之誰、何病、主方何方、町方なれば、何町家主誰店何之誰と認め、支配江出す
- とあって、町方の人びとの診療が許されていたことをしめしている。
- 22) 伊東栄、伊東玄朴伝、東京：玄文社；1916. p.153-154
- 23) 温恭院殿御実紀 続徳川実紀 三篇 東京：吉川弘文館；1976. p.525
- 24) 永井荷風、下谷叢話、東京：岩波書店；2000. p.77-78
- 25) 勅使の下向や將軍宣下、世嗣誕生などのおおきな祝い事や、日光参拝などのおおきな法事がおこなわれるときに、数日間にわたり江戸城本丸の南庭の舞台で式能を催し、その第一日に江戸の名主・家主5000余人を招待して陪観させた。これを「町入能」とよんだ。
- 26) 松平太郎、江戸時代制度の研究、東京：柏書房；1971. p.85-87
- 27) 宗田一、渡来薬の文化誌 オランダ船が運んだ洋薬、東京：八坂書房；1993. p.229-232
- 28) 宗田一、宇田川家三代の実学——『西説内科提要』と関連薬物書をめぐって——、実学史研究 5. 京都：思文閣出版；1988. p.3-21
- 29) 深瀬泰旦、伊東玄朴とお玉ヶ池種痘所、佐賀：出門堂；2012
- 30) 手塚一族の事蹟については以下の論文において報告した。
- 深瀬泰旦、歩兵屯所医師取締 手塚良斎と手塚良仙、日本医史学雑誌 1979；25: 290-306
 - 深瀬泰旦、お玉ヶ池種痘所開設をめぐって その二——川路聖謨と斎藤源蔵、日本医史学雑誌 1980；26: 420-430
 - 深瀬泰旦、手塚良仙光亨知見補遺、日本医史学雑誌 1981；27: 21-34
 - 深瀬泰旦、歩兵屯所の医師たち——『医学所御用留』から——、日本医史学雑誌 1955；31: 372-390
 - 深瀬泰旦、歩兵屯所医師取締手塚良斎致富、日本医史学雑誌 1985；31: 490-502
 - 深瀬泰旦、史料との出会い——歩兵屯所医師取締手塚良仙とその一族、日本医史学雑誌 1990；36: 413-433
- これらの論文はのちに『天然痘根絶史 近代医学勃興期の人びと』思文閣出版 2002 に収録した。
- 31) 斎藤月岑 金子光晴校訂、増訂武江年表 二巻、東京：平凡社；1968. p.169-171
- 32) 同書 p.171
- 33) 同書 p.176
- 34) 昭徳院殿御実紀 続徳川実紀 三篇 東京：吉川弘文館；1976. p.634
- 35) 斎藤月岑 前掲書 p.193
- 36) 同書 p.193
- 37) 同書 p.194
- 38) 緒方洪庵、勤仕向日記、緒方富雄、緒方洪庵伝 第二版増補版 東京：岩波書店；1977.p.494-495
- 39) 内山孝一、明治前日本生理学史、日本学士院編、明治前日本医学史 第2巻；1955. p.247-250
- 40) 中山沃、岡山の医学、岡山：日本文教出版；1971. p.54-56
- 41) 宇田川榛斎、遠西医方名物考補遺 巻四、風雲堂 4丁ウ-19丁ウ
- 42) 沢弼、医学者としての大村兵部大輔（益次郎）、中外医事新報 1931；p.590-599
- 43) 中野操、増補日本医事大年表、京都：思文閣；1972. p.190
- 44) 小川鼎三、明治前日本解剖学史、明治前日本医学史 一卷、東京：日本学術振興会；1955. p.220
- 45) 田中助一、防長医学史、東京：聚海書林；1984. p.124
- 46) 沢弼、前掲論文より引用
- 47) 山崎佐、医制史料 九、中外医事新報 1933；1191: 43-45
- 48) 緒方洪庵、勤仕向日記 緒方富雄、前掲書 p.479
- 49) 緒方洪庵と添田玄春の出会いについては
- 深瀬泰旦、緒方洪庵と添田玄春——西洋医学所頭取役宅の新築をめぐって 日本医史学雑誌 2005；51: 337-354
- においてくわしく報告した。
- 50) 億川ふくあて緒方八重書状（文久3年8月5日付）緒方富雄・梅溪昇編、緒方洪庵のてがみ その三、東京：菜根出版；p.231-236
- 51) 緒方洪庵、勤仕向日記、緒方富雄、前掲書 p.479-483

- 52) 添田玄春の長崎留学については
深瀬泰旦. 西洋医学所医師添田玄春の長崎留学
洋学 2003; 11号: p. 25-50
において詳細に報告した.
- 53) 緒方洪哉あて緒方洪庵書状(文久3年3月20日付)
緒方富雄・梅溪昇編. 緒方洪庵のがみ その三.
東京: 菜根出版; 1994. p. 51-56
- 54) 緒方洪哉あて緒方洪庵書状(文久3年1月23日付)
同書 p. 44-50
- 55) 倉沢剛. 幕末教育史の研究(二)——諸術伝習政策.
東京: 吉川弘文館; 1984. p. 138
- 56) 石田純郎. 江戸のオランダ医. 東京: 三省堂;
1988. p. 176
- 57) 深瀬泰旦. 海軍大医監奥山虎炳. 日本医史学雑誌
1995; 41: 332-348
奥山玄省は維新後、虎炳と改名して海軍軍医部に
勤務して、その最高位である大医監にのぼった。竹
山屯『医事雑記』所収の「ボードエン先生口述」に
ついては本学会元理事長蒲原宏先生のご教示による。
記して感謝申しあげる.
- 58) 倉沢剛. 前掲書 p. 138-142
- 59) 斎藤月岑. 前掲書 p. 193
- 60) 斎藤月岑. 前掲書 p. 168
- 61) 山本俊一. 日本コレラ史. 東京: 東京大学出版会;
1982. p. 19
- 62) 富士川子長. 安政五年虎列刺大流行の事に関する
書類. 中外医事新報 1893; 312: 364-365
- 63) 斎藤月岑. 前掲書 p. 194

Soeda Gensyun; The Official Doctor of the Tokugawa Court, its Medicine and Medical Activity

Yasuaki FUKASE

Department of History of Medicine, School of Medicine, Juntendo University

Soeda Genshun was one of 83 founders of the Otamagaike Vaccination Institution. This paper summarizes his biography, based on Soeda Genshun's diary. Soeda Genshun, was born in 1826, served in Igakukan, Seiyō Igakusho and Igakusho as the official doctor. He furnished some money for the establishment of the Otamagaike Vaccination Institution and then served as the vaccinator. Soeda's medicine transferred gradually to Dutch medicine from Kanran Secchu Igaku.

Key words: Soeda Gensyun, Soeda Gensyun's diary, Dutch medicine, learning in Nagasaki, Otamagaike Vaccination Institution